

横芝の碑

(その六十二)

水神様の祠は知つていた

栗山川の昔の流れを

屋形三本松地区の外れに架つて
いる木戸橋から、横芝寄の栗山川
堤を海の方に下つて行きますと、
暫らくは耕地や養鰻場が広々と続
きます。やがて立合の集落が望見
できる様になつて来る辺りで堤の
下を見ますと、こんもりとした混
合樹らしい森が見えます。たたず
まいや周囲の情景等から何となく
弁天様のような気がするのですが
ここは水神様の森なのです。

水神様というと、大ていは水源
とか流れの分岐点等に祭られています。
水神様の森なので、何となく不思議な感じが
いたします。処が、この水神様も
元は栗山川の流れの分岐点に建つ
ていたのです。

昔の栗山川は、この辺から海に
注ぐ川幅になつていて、川巾も広
く、今よりもずっと低湿地帯で、
川の流れも幾筋かに別れています。
それに、津浪や高汐、洪水等
で幾度か川の流れも変つたので、
水神様も、弁天様と間違えられる
様な場所になつてしまつたとい
うことです。このことについて昔の
ことを覚えておられる三本松の浅

野良策さんは「私の父が神官であ
つたこと等からの聞き覚えも入り
ます」と前置をされて、次の一
話してくれました。「この辺が

川の堤より広く、子供達の格好の
遊場でした。私も兎の飼料の青草
を探りに行つたことを覚えていま
す。堤は其後取払われ、土砂は道
路工事等使われたとかで全くその
痕跡を止めいません。堤ばかり
でなく、総てこの辺
の様相は変つてしま
いました。僅か水
神様だけが、耕地整
理にも、還地分合に
も手を付けられずに
残りました。土地の
所有者はどうなつて
いるか分りませんが、
ここが唯一の昔を語
る歴史的存在という
訳ですね。」話し終
られた浅野さんは



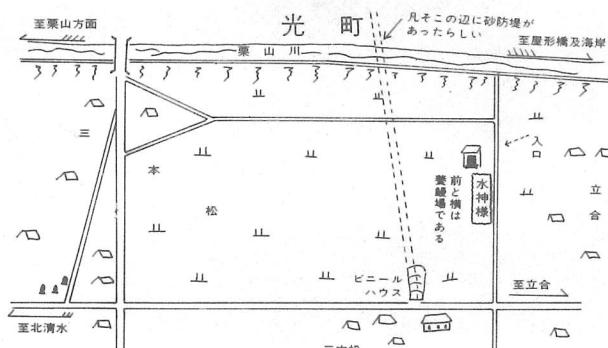
▲木もれ陽の中にひっそりとたたずむ水神の祠

「どうです水神様
に行つて見ませんか」と先に立つてくれま
した。実を言うと、一度足を踏
み入れようとしたのですが、路ら
しい路も見付からずにはまご／＼し
てゐる中に、突然一メートル近い
青大将に目の前を横切られて、泡
を噴つて逃げ帰り、とても一人で
流れに区切られて孤立した島の様
になつて田舟で往来した場所もあ
は入つて行く気がしませんでした

これだけの耕地になつたのは幾度
かの河川改修と耕地整理の結果で
水神様の辺りは河川敷の広い
流れで、それが数本に岐れたり、
又続いたりしていく中にはその
ことを覚えておられる三本松の浅

りました。高汐や津浪の時はそう
した流れを押分ける様に海水が逆
のうつと後の方に砂防堤が築か
れていた位です。堤は相当確りし
たもので、頭頂部の巾は今の栗山
川の堤より広く、子供達の格好の
遊場でした。私も兎の飼料の青草
を探りに行つたことを覚えていま
す。堤は其後取払われ、土砂は道
路工事等使われたとかで全くその
痕跡を止めいません。堤ばかり
でなく、総てこの辺
の様相は変つてしま
いました。僅か水
神様だけが、耕地整
理にも、還地分合に
も手を付けられずに
残りました。土地の
所有者はどうなつて
いるか分りませんが、
ここが唯一の昔を語
る歴史的存在という
訳ですね。」話し終
られた浅野さんは

「水魔が登る様に押寄せる津浪に
早く平穏を！」と祈る里人の念願
がこの地名に残つた。と考えるの
は穿ちすぎでしようか。
○写真は、水神の祠で、木の間を
もれる陽差しが白く光り、かえつ
て辺りに暗さを感じさせています。
祠の両側に見える角材は屋根だけ
になつて倒れかけている小屋の脚
部です。（本稿取材に当たり、三本
松の浅野良策さん他の方々の御協
力と御指導を頂きました。）



文化財審議会委員
小沢春光氏寄稿



立合の天王様の境内に建つてい
る金比羅様の祠が寛政十一年の建
立（このシリーズその五十九参照）
ということですから、それより七
年前という訳です。